

星霧説と中野柳圃

「和蘭藥鏡」といふ我が國最初の薬物學の書を著した宇田川榛齋の養嗣子に、英國のヘンリ (William Henry) といふ人の「^{セイム}舎密開宗」21卷(化學書)を和蘭譯本から重譯した江戸末期の理學者宇田川榕庵(西曆1798—1845)がある。彼は又、文政9年(33歳の時)幕府の命を受けて、當時の天文臺の翻譯方となり、當時幕府が着手したオランダ國のシ、メール百科全書翻譯の昆蟲學の部を擔當し(未上梓)、「植物啓源」(天保5年、即ち1834年)3卷も出版して居る。上記榕庵の、蘭學の先生は馬場穀里であり、そのまた穀里の蘭學の先生即ち本稿の主人公たる中野柳圃(元、志筑忠雄)こそは、我が國に於ける近代的天文學の草分けとも言ふべき人で、其の著「混沌分判圖説」といふ論文は、實に力學の原則から出發して、太陽系の起原として星霧説を主張したものである。星霧説といふのは、言ふ迄もなく、カントやラブライスによつて提唱された太陽系起源論で、今でこそ此の學説では、太陽系の構造中に説明出來ぬ所もあり、また今日の進化した天文理論と矛盾する所も多々あつて、最早や問題にされず、單に歴史的の名のみのものとなつて居るが、曾つては天文學説の花形だつたこともある。此の世界的な學説を、柳圃はラブライス(新説發表は1796年)と殆んど同時代に、而かも全く別に、わが日本に於て考へ出したのである。

元來、この「混沌分判圖説」といふのは、柳圃がニュートンの天文と物理に關する學説をオランダ語から翻譯したと「曆象新書」の附録として加へられたもので、ニュートンの引力説なども、これによつて初めて我が國語となつたのだが、不幸にして版にならなかつた。そして、この「曆象新書」を著したのが、享年2年(1802年)43歳の時であるから、彼の生れたのは寶曆10年(1760年)である。彼は17歳で、養父の跡をついで長崎の通詞となつたが、間もなく辭して、もつぱら蘭學の研究に没頭した。僅か十數枚の小冊に過ぎないが、彼の著した「和蘭詞品考」といふのは、蘭學研究の成果であつて、オランダ語に關する驚嘆すべき逸詣を示して居る。

柳圃は大の交際嫌ひで、一步も書齋の外に出ず、從つて學者としての存在も餘り世間には知られなかつた。こんな譯で、門弟も決してとらなかつたのだが、前記馬場穀里や、また大槻磐里は後年名を成した珍しい門弟だつたのである。そして此の門弟達によつて、次第に柳圃の名が偉大なる蘭學者として廣く世間に知られるやうになつたのだが、残念なことに文化3年(1806年)、爲すべき多くの事を殘して、49歳で死んだのである。(「先驅科學小話」より)